

妹と行った秘境の島

人口約300人、外周2キロ。東京から200キロ沖にある御蔵島。「東京でイルカと泳げる」「太古の森 ラピュタの森がある」「宿をとっていないと上陸出来ない」「日本の巨樹の島」「島への就航率70%」好奇心を注ぐフレーズが羅列する謎の島。辿り着く事さえ難しいその島へ向かった先には…

恋人の旅行でもない

バカンスでもない

意外と珍しい兄妹の旅行記である。

島での出来事や、歴史、不思議な体験を自分の人生と照らし合わせながら
そして妹と歩んできた道程を思い出しながら描いてみたいと思う。

この作品を

7月31日の誕生日プレゼントとして

妹へ捧げる。

第一章 絶海の孤島

2008年7月15日

大型客船がゆっくりと揺れる中、朝6時頃の船のアナウンスで目が覚める。

「お疲れ様でした。船はまもなく御蔵島に到着します」

せっかちな妹と私はあらかじめ、起きたらすぐ出られるようにしていたのでアナウンスと同時に足早に船のデッキに降り立つ。

薄明るい海の向こうに広がる景色に二人共言葉を失う。

「なんて所に来てしまったんだ…」

目の前にある島は言うなればエアーズロックのような形で
ほぼ周囲は断崖絶壁だ。南国の島の様にバカンスで来るような見た目ではない。

島のとっぺんには大きな雲がぴったりくっついて離れない。

どう考えてもまず見た目から不思議島だ。

船が接岸する時に栈橋に10人くらいの島の男達が待っていて、栈橋から二メートルくらいの所で船は停まったまま。船から男達が小さい大砲のようなものを持ち出す。そこから栈橋に向かって縄が4本ほど勢いよく飛び出てきた。

その縄を栈橋の男達が受けとめてロープ留めにくくりつけ、船がゆっくりと引き寄せられる。四千トンもの船の接岸作業が「人の手」で行われる事にまず驚いた。

晴天の時でこんなに大変な作業なのだから少しでも海が荒れたら辿りつけるわけがない。「海が荒れたら栈橋には近付いてはいけない」という島の掟があるぐらいなので、そんな時に接岸作業が出来るはずがない。

私と妹はまずは無事に辿り着いた事に心から感謝した。後で聞くと船の接岸率は年間で約50%、接岸してロープを投げて波によっては目の前で上陸中止になる場合

もあるそうだ。接岸が成功したら船から堤防に階段がかけられ、島の男達がしっと押さえ、観光客を通す。かなり強い風を身体に受けたがその風がまるで島が（二人を）迎えてくれたような錯覚を呼び起こす。そう。この「ポジティブシンキング」が旅をより一層楽しい時間にする。いいじゃないか旅なのだから。

行きの船の中で妹の知枝美は終始はしゃぎっぱなしだった。

そもそも御蔵島に行く事になったのは、知枝美から来た話で、実に5年の歳月をかけてやっと叶えられた夢だったのだ。

第二章 五年前

今は広島県の尾道市の実家にいる妹だが、五年前は東京に住んでいた。

五年前の2003年は私がボーカルとして所属していた、今活動休止中のバンド「ジャンクルーズ」の初期絶頂期。ちょうどサウンドコンテスト03と言っバンドの全国大会で優勝したノリノリの時期である。

（そのコンテストをきっかけに2005年8月にジャンクルーズは念願の全国デビューを果たした。）

妹は大学を大阪で過ごしたが、大学を卒業し、ちょうどその頃舞台女優への夢を追い掛けて東京に出てきた。妹が自分の近くに来るのは高校生以来で、上京が楽しみで待ち遠しかった事を今でも覚えてる。

元々は幼稚園くらいの時は仲良しでいつも一緒にいたが、それ以上は同じ家に住んでいる事が当たり前すぎて妹の存在をそこまで意識してなかった。

妹は今思えば小さい頃から溢れる愛情を表現してきていたのだが、なんせ自分は本来全く強調性のない人間で、一人好きの変わりものだった。愛情表現も知らない。という事でそんなに思い出深い学生生活を送っていない。夏に両親に連れて行ってもらえるキャンプと父親に連れて行ってもらった遠方の海釣りを楽しみに生きていたような気がする。

小学生の頃も「親が心配しちやいけない」という理由で、遊びに行く時は野球道具とか持って安心させといて、外に出たら家の近くに野球道具を隠し、一人で神社に行って本を読んだり海眺めていたりと究極の一人好きで、全くヒト科の生き物に興味がなかったのだ。妹にはほんの少しだけ興味があつたレベルだ。

私が大学に進学してもそこはあまり変わらず、特に連絡とかを取る事もなく、よく妹にはたまに話す時には

「お前の存在を忘れとった」って言うてからかかっていくくらいだ。しかしそれはある時を境に激変した。

大学の時に友人の結婚式で歌う為に大阪に行った時に妹の家に泊めてもらった。妹の家に立ち入るのは初めてだったが入った瞬間に妹への興味が覚醒された事を今でも覚えている。考えてみれば妹だけの部屋に入るのは初めてだ。実家の部屋しかしらないがそれは実家混じりの文化であって一人暮らしは部屋の隅から隅まで自分の文化を作り上げる。

部屋に入った瞬間の映画のビデオの量に驚いた。

「そう言えば知枝美って映画好きだったよな…」

部屋の棚の配置や造り、カーテンの色、次から次へと知枝美文化が目の中に入ってくるそして妹への興味の決定的だったのは行きの新幹線の中で作った女の子ボーカルの曲を妹に歌詞を書いて貰った初めての共同作業だ。

ICレコーダーにハミングで入れたメロディラインを聴きながら妹はどんどん歌詞を描きあげていった

自分は才能ある人間に惹かれてしまう癖がある。どんなジャンルでも自分の能力を超えた実力を見せつけられるとものすごく興味が湧いて来る。

その妹の才能を目の当たりにし、初めて自分には妹がいる事を意識し始めた

妹は実力で兄から興味を引き出したがそれにしてもなんと言う兄だ…

その時に作った曲「永遠のクリスマス」は東京に帰ってもずっと

ICレコーダーで聴いていて、聴く度にその時の共同作業を思い出していた。

よっぽど楽しかったのだ。自分は飯より曲作りの方が好きだ。

曲を作る時に出来るまで飯を食べるのを忘れるくらいだからそうなのだ。

そんな自分についてこられる奴がこんなに近くにいたなんて驚きが喜びに変わる

その日から何年かして東京に妹が出てきた時はもうすっかり妹馬鹿の兄が出来あがっていた。家も自分の家のすぐ近くに住む事を薦め、歩いていける距離に妹は住んだ。

何日か連絡のない日は心配で電話をかけ、風邪をひいたらありったけの材料を持っていきおじやを作り、林檎をすった

兄である事に意識し始めるのは遅かったが、意識し始めると人生は二倍楽しくなった。

妹は究極の兄想いだ。手間味噌だがこんなにいい妹はどこ探したっていやしない自信があ

る。妹のいる東京生活は本当に楽しかった。その中である日突然妹が嬉しそうに言った。た。

「お兄ちゃん！御蔵島って島が八丈島の近くにあってそこは神様の島でイルカが守ってるんだって！中々辿り付けられないよ！御蔵島に行こうよ」

突然なんなんだこの子はと想ったが兄を真っ直ぐ見つめる潤った硝子玉のような眼とそんな童心をくすぐるようなキャッチフレーズを聞かされて心動かない訳がない

「よし！行こう！花さんも好きそうだから声かけようや」

花さんは後に私がギタリストとして出演した映画「あなたを忘れない」の監督である。

そんな島本当にあるのかな…イルカが日本にいたなんて聞いた事がないと思いつつも心はワクワクだ。

「お兄ちゃん、御蔵島って伊豆七島の中で神様の大事なものを納めとく蔵があるから御島って名前がついたらしいよ」

そんな事言われるとドキドキだ。絶対に行かなきゃ！

ちようどその頃知枝美は小説を書いていて不思議な島へ行くシーンでとまっている。

彼女は小説の才能も多少あるのか、その内容がかなり面白かった覚えがある。

その続きは御蔵島に行ってから書くと言っていたが結局小説を完成させないまま、妹は広島に帰事になった。

少しの間だけ帰って家の仕事の手伝いをしてくるといふ事だったがなんとなく東京に帰って来る予感がしなかった。妹が帰った後は脱力感と寂しさで当分落ち込んでいた。

そして妹は予想通り東京に戻って来る事はなかった。

第三章 3週間の東京滞在

それから五年間お互いに生活も変わり、御蔵島の名前もいつの間にか出なくなっていた。

行けない島の名前を出してもしょうがないので出なくなるのは自然の流れだ。

しかし、最近になって妹が東京に長い間滞在出来る話になった。というのも、

実家の仕事はがんこ屋と言う食材卸の会社なのだが、そのがんこ屋が扱っている尾道ラーメンの東京進出のお手伝いをしてくれると言う人が現れ、事務的な事が出来る人間が必要となったので妹が東京に長い間滞在する話になったのだ。

しかし、音楽を離れてがんこ屋の仕事をしようとしていた私が再び音楽の世界に戻る事となり、その流れはごろっと変わったのだが妹の東京滞在はとても運よく決定となった。

そしてその後妹から電話があった

「お兄ちゃん！東京にいる間に御蔵島に行こう！」

「あ？なんだいきなり……行くかどうかは、行ってから決めよう！」

我々兄妹は決断が早い。まずは自分のスケジュール調整だ。御蔵島は竹芝棧橋から夜10時頃の船に乗り、約7時間で到着するので、二泊三日なら4日は時間を取らなきやいけな。朝から夜まで毎日びっちり予定入っていたがそれは無理矢理調整した。そして7月14日の夜から17日までばっちり空ける事が出来た。

行きの船予約や宿探しや旅の予定は全て妹がやってくれた。私は自分が先導する旅以外は何もしない所がある。やるならとことんやらなきや気が済まないし、いちいち口を出したくなるのでなるべく手を出さない事になっている。

もし自分がこの旅の先導者だったら、間違いなく細かい旅の葉を作っている事だろう。最近イベント企画でパワーポイントと言うプレゼンテーション用のソフトの使い方を覚えてしまったので、更に芸が細かくなってしまったから尚更だ。

知枝美も元々そうゆう細かい所までちゃんと調べて予約もきちっとやるタイプなので、何も心配してなかったが宿の予約時に予想外の出来事が起こった。

宿の予約も船の予約も無事出来たのだが、なんと9月の半ばまで予約でいっぱいので15日から17日以外は一日も空いてなかったのだ。

ここでまた、御蔵島において言われているような気がする、ポジティブシンキングが出てくる。本来なら御蔵島に行くには二泊の予定ならば一週間の余裕とその分の宿泊費用を用意しなきゃいけないのだ。

最初にも述べたが、島に着く直前で風が強くて接岸出来ずに引き返す事になった人は山ほどいるとの事。着いたはいいが帰れないとか、行きたいのに何年も行けない人もいるらしい。東京と八丈島の船を繰り返し、4日間ずっと船に乗っていたすごい人もいたらしい。

島の人は言う

「この島には例え大統領だろうが来られない日には来れねえ」

そんな島なのに私は堂々と旅から帰る次の日には仕事を入れた。

お金もそんなに持って行かなかった。この自信には理由がある。

御蔵島に行く目的は二つあり、一つは野性のイルカと泳ぐ事、二つ目は神様の森の

奥に鎮座する神社にお参りに行く事。

このお参りが1番の目的なのだ。私も妹も小さい頃から神社が大好きで今も当たり前のようにお参りに行く。そしてお参りが目的の場合に雨が降ったり、辿り着けない事はまずない。だから今回も当然のように行けるし予定通り帰れると思っていた。

案の定、天気は滞在中ずっと快晴でお参りの日は曇りの予報だったのに、島の人々が驚くらしい。ここ最近で珍しいくらい青々とした空が広がったお参り日和になった。

そして我々が帰った次の日から雷を伴う雨が降ったそうだ。

日にちが決まり、宿も決まったら後はワクワクする事がお仕事だ。

妹とサイトで御蔵島を開いてみたりして、これから足を踏み入れ不思議の島の情報を分かち合う。

ラピユタの森と言う場所が出て来た時は、私の100メモリある喜びのバロメータが満タンになり、テンションが最大になる隣で、妹の二万メモリある喜びのバロメータが全快になり、私を軽く押し潰す。

妹はとにかく喜ぶ大袈裟に喜ぶ。喜び方が尋常じゃない。

時折あまりにも喜びすぎて動きが止まっている事がある。

私は旅先でテンションを最大に上げると自分を見失う事があるので、一応落ち着きは常に心掛けている。

昔こんな事があった。

初めて沖繩のケラマ諸島の座間味島と言う所に男4人で行った時に、終始ずっと一人で動かしっぱなしで、何もかも目に入るもの全てが新鮮で、宿の食堂でご飯が出て来た時も、

「すげーすげーこうゆう食堂大好き！」

赤身の不思議な刺身があって更にハイテンション。

「俺釣りやるけどこんな魚初めて見た！！おばちゃん！この魚はなんの魚ですか！！？」

沖繩の魚？！..！」

そしたらおばちゃん

「あ？それマグロ」って言って去って行った。落ち着いて見たらどう考えてもマグロだ。

妹はそんなのではない。どこまでも喜ぶ。喜び過ぎて吐いたりしないか心配になるくらいだ。妹との旅行は初めてだが、旅行を泊まりと言う枠にはめないのであれば、

お参りに行く為に遠出をする事はある。

お参りの理論、神様の理論

人それぞれの想いがあるだろうが、私も自分なりにちゃんと心得ているつもりだ。だてに小さい頃から神社に通ってない。なんとなく解る事だつてある。

だから参拝とか色んな人を見て、想う事がいっぱいある。

その持論と御蔵島旅行は密接な関係があるので、

深く入り過ぎずにさらっと自分の体験をもとに段々作りあげられた自分の中での神様と
言うものを論じてみたいと思う。

あくまでも持論だが。

第4章 神様といふもの

これは多くの人が様々な意見を持っている事だろう。すごく繊細な話になってくるし一歩間違えたら某首相のように悪気はなくても日本中から攻撃を受ける事になるくらいの事項なので、出来るなら触れたくない。後に続く話をわかりやすくする為の材料として滅多な事では出さない。さらっと聞いてもらえたらありがたい。

基本的に私は無宗教だしそういう話も苦手だ。自分の中で全部処理して外には

池永一族は遠く遡る先祖の関係もあり、そういう方面では力が強すぎるので我々にとっては当たり前の事が普通じゃない事が多い。公に言えない事も実に多い。

前文でも触れたが、私は小さい頃から神社が好きでいつも遊びに行っていた。

何故か寺より神社が好きだった。

そして小学から高校までは墓参りが習慣だった。詳しく言えば、小学生は神社と墓に通っていて、中学を過ぎると墓参りが主になっていた。

何故行くかの理由はなく、学校帰りに友達の家に行くついでに墓を掃除したり夏で暑かたら水をあげに行ったり、花が枯れていたら裏山から適当に取って持って行っていたりしていた。

だから盆や正月とかみんなが行く日にはあまり行かなかった。いつも行っているからだ。

私の中の神様は当たり前のように居て、それはまた御先祖さんとはまた違うものだった。そういう見えない存在を信じる信じないは本当に人それぞれだし、いいとも悪いとも言えないと思う。

信じすぎて自分を見失うくらいだったら、信じない方がいい場合だつてあるだろうし、何でも頼ってしまつてそれがうまく行かなかつたら何かのせいにしなきゃいけないような人も信じない方がむしろ幸せだし、そのジャツジは誰かがするべきものではないと思う。

自分の中では当たり前のように居て、特別に大袈裟にフューチャーするような存在ではないのだが、やはり自分も大人になり、今までの人生を振り返ると不思議な事があまりにも多過ぎたので、感謝する意味でも、新しく出会う意味でもお参りには今も行く事にしていく。その時に自分の願ひ事はなるべくしない。

大切な人の健康や自分ではどうにもならない事以外は全部自分で叶えるものだと思つてい

るし、むしろ愛があるならそんなすぐ叶える訳がない。

魔法で叶えられた夢は魔法が解けたら崩れやすいものだろう。きっと。

だからその存在は心の奥にいて守ってもらっているから大丈夫！と言う強い気持ちをいつも貫っている。それだけで十分ありがたい存在である

9、10歳の頃、尾道の良神社と言う所の900年樹の下で、本読み疲れて眠っていた時に、ぼんやり夢の中で、木の中から手が出てきて、ずっと頭を撫でられていた。

温かいものに包まれている気になって余計に安らかに眠る事が出来た。

起きたら完全に頭に感触が残っていたのだが、特に驚きもせずきつと神様だろうってまた寝た。今もその感触を覚えている。

実家のがんこ屋にある神棚の前で寝ている時も、よくそうゆう類の事が起こる。

私は神棚とか神社とか行くと身体が熱くなってすぐ寝てしまうのだ。

神様は温かく厳しいもの、そしてこの世に沢山いて、みんな元は人間だったと言うのが一番自然な気がする。

神様だから心が読めるとかそうゆうのはないと思う。元が人間なら礼儀も必要だ。

好き嫌いもあるだろう。そう考えたら余計に付き合ひ方がわかると思うものだ。

だから参拝の時も最大の礼儀を尽くす事が覚えてもらえらる近道だと思っている。

普通に考えて自分が神様だとして、知らない人がいきなり来て、名前も名乗らずに、ポケットから出した小銭を賽銭箱に投げて、宝くじ当たりますようにと言われて当てさす人いるだろうか？

もし自分だったらと思って参拝も墓参りもした方が私はいい気がする。

そしたら神様も好きになってくれるかもしれない。

もしくは好きになってくれると思ひ込む事が出来る。

神様は自分の中にあるものって言うのはそうゆう事じゃないだろうか。

「信じる信じない」事にフューチャーする必要はないと思う。それは自由だから。

その他にも自転車を猛スピードで坂を降りている時に、誰かに首根っこを掴まれて倒された事がある。そのまま自転車は道路に突っ込み、車に思いつきりはねられた。そうゆう類の出来事は、いっぱいある。

4次審査まである全国大会のサウンドコンテスト03で優勝した時も後からプロデューサーに聞いたらこんな事が。

まずは「君達は運が良すぎる。」って言われた。話を聞いてみたら

選考用に送られてきた1000本以上のテープを朝からずっと選考委員と聴いているうちに、疲れてしまっ

「少し珈琲でも飲みましようよ、疲れました」

って事になって休憩。そこにコンポが置いてあったから、珈琲を飲みながら一曲くらい聴きますかって、持ってきたテープを入れたら、そのラッキーな一本が、

私のバンドのテープだったそうだ。

そして全員が最後まで聴いた後（まず最後までできく事はない）

このバンドは最初まで残りますねとなり、代表の私に電話が選考委員から直接かかってきた。

「最終ステージまで残ってくれると我々は信じています。最後まで諦めないで下さい」

私はその時何をしてたかと言うと、尾道凱旋ライブを終えた後に、バンドのギタリストが突然やめてしまった。決してコンテストを受けられる状態ではなかったし、テンションは下がり放題。

考えた結果コンテストをリタイアする事を決め、いつものように墓に報告をしていた時に、ポケットで何回も電話が鳴っていて、最初は墓参り中だから出なかつたのだが、墓参り中だしなんか胸騒ぎがし、「もしかして」って思ってたたら、その電話だった。

その一本の電話をきっかけに私はテンションを取り戻し、サポートギターを入れ、その全国大会で4次審査全てトップで勝ち抜き、バンド部門で見事優勝、二年後に全国デビューした。

を返す存在でもある。

参拝の時に必ず言う言葉。

「どうぞ私の身体を世の中の為に使ってください」

今私は音楽以外にも色んな活動をしている。その事により世の中に笑顔が少しでも増えれば良いと思っている。そして私は「出会い」と言う報酬をいただく。

今やあちこちから

最近でも自分のずつと気になっていた神社に行ったら、そこから不思議現象続きで、それは一緒に行った人にも同じく起こった。

書くときりがないのでここまでにしとくが、私にとつての神様は心をしっかりと支えてくれる重要な存在であり必ず恩色んな話をいただくようになった。お金にはならないが、今自分が死んだら地獄には行かされないって堂々と思える人生を歩いている。

頼りすぎず、大切な場所に閉まって時々夢の中に出てきて教えてくれたり、

試練や苦勞を与えてくれたり、頭の真ん中に「やれー」と言う直感を落としてくれたり

こんな事言うとかバチが当たるかもしれないが、自分にとつては崇高すぎず、大切にしてもらっている気にさせてくれる良きパートナーって感じ、それが私の知っている神様だ。

誰かに存在を押し付ける意味もないし、存在を感じるならば自然の流れに身を任せればい

なのだ。

だが思い込み機能は使い過ぎると毒だが少しくらいは使わないと損だ。自分の事だけ話したがうちは妹、父、母、全て歩く不思議現象だ。

御蔵島参拝はそうゆう意味ではすごく重要な参拝だったのである

第五章 出発の日

2008年7月14日。とうとう出発の日がやってきた。

私は16時まで仕事をし、その後買い物に行き、家に戻り準備をする。

船が2時半頃なので朝6時に着く時の朝ご飯を用意してきてほしいと宿から言われたので、世界一好きな食べ物「筋子おにぎり」を妹に作ってもらい、鶏の唐揚げを作ってからそれを詰めて、参拝用の山登りの準備をする。

以前にジャンクルーズ（バンド）STAFFの鯉谷淳君に誘われて登山に二人で行った時に私はハイキングと勘違いをし、手づらにスニーカー、ジーパン、ジャージで行って怒られた事がある。もうそんな事のないよう、今回は用意周到で行った。

しかしバンソーコーと頭に付ける懐中電灯まで持って行ったのに悲しいくらい必要なかった。

用意が終わって竹芝桟橋に向かう。船には出航の時の美しいお別れが必要だ。

今回はSTAFFあこちゃんが選ばれた。22時過ぎに船が到着。もう憲彦&知枝美

は堪えられなくなり、おにぎりを食べる。二個ずつ食べた。

そしていよいよ出航の時。あらかじめ、お別れの時にちゃんと向こうが寂しくなるように、

「もしかしたら帰れなくなるかもしれないし、これで最後かもしれない。

俺達に何かあったら御蔵島の方を眺めてね。もしそんな事あっても私のお墓の前で泣かないでね。そこに私はいないから」

「どこかで聞いた事ある事言わないで」と、理解出来ない事を言いながらかなり落ち込んでいた。

準備はバッチリだ。船到着のアナウンスが流れ、船客達がなだれこむ。みんなそれぞれが旅の始まりに楽しそうな顔をしている。（もちろん島に帰る人もいるだろうが）船に乗り込む前に、あこちゃんに笑顔で手を振った。また会おうね。そして大声で伝えた。

「ありがとう」

彼女は泣いた。たった三日なのに泣いた。私は面白さと達成感に酔いしれた。

出航の時はそんな私達の背中を押すように寂しい音楽がながれた。

その音楽に乗せて笑顔で手を振った。また泣いた。たった三日なのに。

最高の出航に心踊らせ、部屋に行く。部屋に戻った頃にはそんな劇的な別れがあったなんてすっかり忘れていた。

初めての二人だけの船旅・・・船は二等和室と言う所謂「雑魚寝」部屋だ。

こうゆう所は大好きだ。父親と釣りに離島へ行った事を思い出す。中学の時に父親に平日に釣りに行くぞと言われ、「その日は学校だよ」って言ったら

「学校と釣りどっちが大事だ！」と怒られた事がある。なんて素敵な父親だ。

そんな思い出もありながら妹と船旅は初めてなので御蔵島も楽しみだが、そちらの方もかなり楽しかった。

この旅の素晴らしい所は兄妹であって恋人ではない事。だから普通の恋人とは全く違う楽しみ方が出来るのだ。

普通は中々味わえないだろう。今回はこの旅を妹がプレゼントしてくれた。

恥ずかしい話だが、私は働いたお金を自分のイベントや活動の為に夜な夜な動き回って使ってしまったって全く余裕がなかった。そんな兄に今回は旅をプレゼントしてくれたのだ。

だから今度は自分が連れて行きたいと思っている。楽しみがまた一つ増えたのだ。

プレゼントしてくれた事は嬉しいが、旅の相手に当たり前のように自分を選んでくれたと言う事は、もっと幸せな事なのだなど、ぶつぶつと考えていた。

昔は俺と行けるなんてなんて幸せなやつだー！おらおらって思うタイプだったが、歳をとったものである。そうしている間にもう妹は面白き光景をキャッチした。

ちょうど出航の時に我々が STAFF あちゃんに手を振り、涙の別れをしている頃（泣いたのはあちゃんだけ）に、隣でお別れをしているカップルがいた。カップルじゃないかも

しれないが船を待つ時にかなりラブラブだったのを覚えているから、ただの友達ではなさそうだ。

船に乗ったのは女の子。いつまでも手を振っていたから、きっと寂しいのだろうなって思っていた。一人で荷物が少なく、顔立ちもなんとなく島の雰囲気だったので

帰っているのかなと思いつながら妹と一敗のカップヌードルを楽しんだ後、部屋に戻った。

そしたらその子はなんと我々の寝る場所の向かい側で、もうすでに一人で来ていたはずの男性と仲良く話していた。思いつきり初対面なのは間違いない。

その切り替えの早さに妹とびっくりしていたのだ。まあそんな事も忘れ、竹芝棧橋で貰ってきた色んな島のパンフレットを見ながら、妹と楽しむ。

初島、大島、神津島、式根島、御蔵島、三宅島、青ヶ島、八丈島色々と見ているうちに

眠たくなる。

携帯は全く繋がらないので会話を楽しむ。いつの間にか眠りについていた。

6時より前に一度朝のアナウンスが流れる。

「三宅島、三宅島に到着です」

我々は目を覚まし、朝の海を見る為にデッキに行こうとする。

そしたらな・な・な・ななんとその仲良くなっていた一人旅同士の男女が

一緒に同じ毛布でカップル寝をしていた。

朝一発からかなり刺激が強かった。何と言う事だ…気が合えばその場で会った人と船みたいな公の場所で一緒に寝られるものなのだと、ショックを受けた。

そんなのはさておき、デッキに出たら三宅島が見えて大きな雲が島にかかっているかなり神秘的だった。

妹はもうすでに写真を撮りまくっていた。これから三日間もあるのに…

そしてまだ眠いので、部屋に戻って一眠り。次のアナウンスで御蔵島に到着する。

第六章 鉄砲場

御蔵島に着いた時は本当にびっくりした。朝6時の島は神秘的で見た事もない風景に私の100メモリーはある喜びのバロメータが一杯になってテンションMAXになった頃、隣で二万メモリーある妹のバロメータがMAXになり「鬼はしやぎ」で私を圧倒させた。

栈橋には宿の迎えの車が何台か来ている。「鉄砲場」と書いてある我々の車もすぐ見つかった。鉄砲場とは宿の名前である。

何故鉄砲場と言う名前なのかを聞き忘れた事だけが、今回の旅の大失敗である。明らかになんか意味ありそうではないか。

鉄砲場のご主人の道雄さんは口ヒゲをはやし、少しパーマがかかっている、もちろん日焼けしていて、いかにも海の男って感じの人だ。

他にもお客さんが車に乗ってきて、感じの良さそうなカップルだ。彼氏らしき人は背が高く、眼鏡をかけていて24、26くらい年齢と思われる。彼女は身長158センチくらいで、一言で「いい子」って感じの女性だ。

「こんにちはは、お世話になります」みんな挨拶をし、車に乗り込む。全員のワクワクが止まらない感じだ。驚いたのは棧橋付いて、車に乗り、出発していきなり急な坂を登っている。島唯一の部落は全部坂の上に作られている。

なんて所だ…
坂をどンドン登っていき、右手に海と島を見ながら更に登った所の坂沿いに宿はあった。車を降りて、ご主人の説明がある。

「まだ宿泊客がいるので昼まではここで休んで下さい。後で説明に行きます」と宿の隣にある家の一室に案内された。

確かに6時に宿追い出されたら嫌だろう。

良さそうなカップルと我々はご主人から島の地図を渡され、それに基づき、島の心得やルールを説明してもらおう。

我々の予定は島に来て決める事になっていたから説明を聞きながら予定を組んだ。島のルールについては後ほど説明しよう。御蔵島の魅力の一つだから。

池永兄妹の予定

15日

午前中…稲根神社拝殿参拝

午後13時30分　ドルフィンスイム

18時30分　夕食

終わり

16日

午前中…　稲根神社本殿参拝

18時30分　夕食

終わり

なんて贅沢な日程だろうか！この夕食ってやつも普通の夕食じゃなく、また面白いのだ。最初は全く意味がわからなかったのだが。

一行は一通り説明を聞いた後、ドルフィンスイムまで時間があるので散歩したりしながら、それぞれの時間を過ごす。

私と妹は直ぐさま神社に行く準備を整え、宿を飛び出す。

第七章 稲根神社拝殿

稲根神社拝殿は宿から3分くらい場所にある。拝殿とは、礼拝を行う為に本殿の前に設けた神社の前殿の事だが、ここでは本殿が遠くて行けない人の為に造られた村の中に造られた神社の事だ。

まずは妹とそこに向かい、すぐに着いた。拝殿は中々立派なもので、本殿よりも大きい。宿から左手に見える海を眺めながら下って行き、ちょうど曲がる場所に

幼稚園があり、その向かいに鳥居があつて石段を登っていく感じになっていた。

いつも思うが、神社ってかなり暑い日でも神社の鳥居をくぐると突然涼しくなる。今回もそうだった。

まあ、木がいっぱいあるからそれで光が遮られ、涼しいのもあると思うがあの神社特有の涼しさは個人的に大好きだ。

妹と石段を登り、二礼二拍手一礼をし、この場所に無事来られた事の御礼を言う。

今回私はこの拝殿でいきなり先制パンチをくらった。いつもは絶対にならない事のだが、鳥居をくぐった瞬間に今まで感じた事のない強い力を感じた。

頭の中を支配されるような不思議な感覚。

「なんだこりゃあ」

「やばいねこり」

石段に分かれ道があつてそこに三宝神社と書かれている所を登つてそこでも御礼を言った。

「妹とこうして5年越しの夢が叶い、やっと来る事が出来ました。本当にありがとう、ございます」

その三宝神社の時は、ビークに目眩がしてその場に座り込んでしまった。

「ここはすごい所じゃのう…毎日来よう」

妹も「うん」と頷き、宿に戻る。妹は妹です、すごい力を感じたようだ。

宿に戻ったら私はすぐぶっ倒れてしまい、頭がぐるぐる回った。そのまま寝込んでしまい、何度起きても天井がぐるぐる回っている。

ドルフィンスイムやばいなと思っていたが、なんて事ない、もう一度寝た時は完全に元気になっていた。カップルは散歩をしていたらしい。

主人の道雄さんが来て

「もう時間だから準備をしよう」

我々兄妹はウエットスーツも足ヒレもシュノーケルもレンタルした。ウエットスーツは暑くてしょうがない。

「こりゃあ痩せるわ」と兄妹かなり上機嫌。そして車に乗り込み、海に向かう。

本当にイルカに会えるのだろうか：ワクワクドキドキだ。

第八章　ドルフィンスイム

ドルフィンスイムは希望が多いけど海に入る人数は決められているため、抽選になる事も多い。今回は運よくすんなりと海に入れた。ドルフィンスイムは、2時間ほどかけてボートで島を1週し、イルカに出会うごとに、ボートから海に飛び込んで一緒に泳ぐというツアーだ。ただし、相手は野性のイルカなので、逃げるように潜行してしまうこともある。しかし、人の周りをグルグル回って遊んでくれることもあるそうだ。

潜行してしまうのは授乳中の母イルカ、遊んでくれるのはオスのイルカのことが多いらしい。

イルカに会う前にシュノーケリングの練習をする。久しぶりのシュノーケリングだったが、感を取り戻すとすぐだ。説明を聞いた後にドボンと海に飛び込む。ウエットスーツの隙間から入ってくる海水がひんやりして、入った瞬間にあまりにも寒さに心臓がバクバクした。しかしそれはすぐに慣れて泳ぐ事が楽しくなった。慣れてきた頃に船に上がり、今度はイルカに会いに行く。いよいよだ。

一緒に付き添いで来てくれたのはナナさんと言う御蔵島7年目のベテランだ。

海が似合う女性で、今回は水中ビデオカメラを持って来ていた。イルカを撮る為だそうだ。

私は当たり前のように泳いでいる自分達を撮ってくれるものだと思い、そんな自分にぼっとなってしまった。

ドルフィンスイムにはルールがあってまず船の後ろにいかない事。スクリーで怪我をする事があるからだ。

船頭の指示なしに勝手に海に入らない。イルカは絶対に触ってはいけない。それらを守れば最高のドルフィンスイムが待っている。

「今日は風にはイルカいないから島の反対に行くね」

道雄さんはそう言いながら船を運転する。宿の人は基本的になんでも出来る人が多い。

船の操縦も森のガイドも狭い島だからだいたい島人は島の事を知りつくしている。

船で島を一周それだけでもかなり楽しい

御蔵島は水の島と言われるくらい水が豊富な島だ。伊豆諸島で唯一水力発電所がある島で、島の上空で発達した雲が降らせた雨や霧は森の木々に蓄えられて、湧き水となって再び現れる。

島の周囲の海食崖からは、この湧き水がつくる滝が直接海に流れ落ちている。

その水は森の養分を含んでいる土を流れてから海に流れ込む。その大量の水がプランクトンや小魚の餌になる事もイルカが棲息しやすい理由の一つだそう。

後はイルカにとって御蔵島が安全である事。御蔵島の人達は昔からイルカを漁の対象にしなかったと言うのもあるし、御蔵はほとんどが険しい崖で波打ち際は全て岩礁か玉石だ。

唯一の港を除けば人の手が全く加えられていない。日本の中でも数少ないイルカが住むに適している島だ。

船がイルカの場所に近付いて来たその時にすごい事が起こった。島の崖の上から

「ガラガラッ」って音がして、なんだと思っただけでみると、土煙があがっている

土砂崩れだ7年住んでいるナナさん（実にゴロが良い）も初めて見たそう。

道雄さんはぼそって言う。

「また御蔵が小さくなってしまった」

道雄さんがたまに漏らす言葉は面白い。滅多にない貴重な体験をさせてもらった。

そしてそうこうしているうちに見つけてしまった。

「イルカだ！！知枝美！！いたぞ！！」

「どこ？どこ？」知枝美は探しながらついに見つける

「わぁーお兄ちゃん！イルカだよ！！！！見て！！」

私が見付けたのに彼女の中では歴史が変わっていた。そしていよいよシュノーケリングの準備だ。用意してイルカの進路を道雄さんが予測してから

指示通り海に飛び込む。もう中に潜ったらいきなりイルカと遭遇した。初めて見る野性のイルカ。

「そりゃあ沢山の人がこいつに心奪われてしまうはずだわ」

ゆっくりと泳ぐ姿に筋肉質で流線型の身体、笑っているような口の形。時間が止まっている気がする癒しの時間。と思っっているうちにイルカはあつという間にあつち行ってしまった。船に戻り、次のエリアへ。カップルも妹も興奮気味だ。妹の喜ぶ姿と言ったらこれまた恐ろしい。

喜びのあまり食べられるかと思った。船が波でジャンプする時も「ヒューー!!!ひゃっはっは!!!」って大はしゃぎだ。

その姿は小さい頃に釣りに連れて行った時に魚がかかった時に嬉しそうに口開けてリールをまわしている姿と同じだ。

その嬉しそうな顔があまりにも可愛くてそれが見たいが為にまた連れて行つたくらいだ。

そう。喜び上手は人生で得をする

それを思い出して懐かしがっていた。海ではイルカウォッチング、船では妹ウォッチングと兄は大忙しだ。

そうしている間にまたイルカが出現した。そして同じ手順で潜る。今度はイルカが「ターンしてしまった為にまた船に戻り、出直した。

また次の群れを見付け、潜る。今度はすごかった。向こうの方からこっちへイルカが真っ直ぐに泳いできた。

まるで笑っているかのような顔がゆっくりと近づいてくる。

感動で胸がドキドキした。自分は特別だ。病に少し侵されている私はきっとイルカが自分にだけ心を開いてくるだろうと思っていたので泳いで来たイルカに近付いた。

ついにイルカと眼が合った瞬間！

かなり迷惑そうな顔で私を見て通り過ぎて行った…

船が上がったらそれが可笑しくて妹に話したら妹も同じように感じたそうだ。

子供を連れてイルカや地面に背中をスリスリして遊んでいるイルカや海の中には感動がいっぱいだっただ。

この海は絶対に守っていかなくちゃいけないなと思った。カップルも妹も船に上がってすぐ喜んでいた事があった。

「イルカの鳴き声聞いた!!!」

「うんうん、可愛い声で鳴いていたよね」

「…」

私は黙り込んでしまいそうになったが「アハハ」と軽く流した。実は海に潜るとイルカを呼ぼうと思っただけで海で私は奇声をあげていた。その「イルカの鳴き声」は多分私の鳴き声だ。

その事は思い出を壊さないように今も妹に言っていない。実に妹想いの兄だ。最後のドルフィンスイムを終え、船で港に戻る。

感動をそのまま宿に持って帰る為に船の上ではみんな興奮気味だ。

私はみんなが興奮している姿を見て興奮していた。基本的に人が喜ぶ姿が好きな性格なのだ。

港に戻り、車で宿に戻る。ウェットスーツを脱ぎ、水洗いをして乾かした後、水着のままお風呂に入るお湯が温かくてなんと気持ちのいい事か。

私は風呂に入ったまま得意の30分睡眠に入っていた。その30分の充電でリセットされ、元気になるからだ。

是非オススメする。

さあ今日のやる事は終わった。後は食事の時間だ

第九章 独特な食卓

宿をとる時に妹は道雄さんに不思議な事を言われたらしい。

「夜ご飯は一品だけ出ますが基本的に自炊です。各自で作っていただいて、それをみんなで食べます。ご飯と味噌汁は付きます。」

「→って言われたんだけどお兄ちゃんどう思う？みんなで食べるってどうゆう事？私達が作ったものをみんなで食べるの？」

妹はなんだかんだで、意味わからん事を言われるのは嫌いじゃないはずなので、

その口調は少し嬉しそうだった。私も全く意味がわからなかったが、どうやら宿の宿泊客みんなと道雄さんとスタッフそれぞれが材料を買ってきて作り合い、みんなでご飯を食べると言う事らしい。

それは料理好きの私にとっては大きなイベントのにおいがした。妹と島で二つしかない食

材の店「丸一商店」に買い出しに行く。

その途中で島唯一の郵便局にお金を降ろしに行く。そこであるポスターを見付けた。

ジャニーズの某有名グループの一人が郵便局のマスコットになっているのだが、彼はかなりの友人である。なので早速メールする。

添付にそのポスターの写真を付け、

「なんだよー御蔵島にいるなら、そう言ってくれよ！困るわ」
すぐに返信が来た。

「そっちこそ来るなら来て言ってくれよ！」

(怒ってる絵文字) こっちだって色々準備があるんだからさあ！」

彼とはよくわけわからんやり取りをする。どんな振りでも必ず乗ってくる。

忙しい人なのに、それが彼の人気の秘密なのだろう。

ほんわかった気分になった後に丸一商店に到着。夕食の材料を選ぶ。

御蔵島は物価が高い。物資が周に一度しか届かなく、それが木曜の朝だそう。木曜の朝は我々が帰る時だからちようど物資が少ない時期だ。

ガソリンもなんと1リットル280円だ。昔は今のようには橋がなかったのだ。

物資が届いたら船は離れた所に停泊し、船の男がふんどし一丁で小船で物資を取りに行く。冬だろ？がなんだろうが関係ない。

ふんどし一丁で海に入っていくから体力のある若者が選ばれる。

女性は女性で更にすごい。物資は、昔は物々交換で御蔵島は豊かな森の中に

昔は高級とされていたツゲの木が沢山自生しているのだ。得に御蔵島のツゲは最高級品として扱われ、そのツゲが島の経済のほとんどを支えていた。

一時は(1986年)御蔵島の印鑑を三宅島の役人に預けた事がきっかけで三宅島の支配下になった事があり、三宅島の役人の意思でツゲがほとんど掘り出され、その代金が御蔵の人達に還元される事はなく、ツゲの産地なのに貧しい生活を強いられていたそう。

なので食料自給に限られたこの島では

「百人越えたら油断するな」

として長男以外の結婚分家を許さない人口抑制制度をとらざるを得なかったのだ。

三宅島から独立してからは、徐々に人も増えてきたそう。

そうゆう経験もあり、島の人達は生きる為の知恵を最大に使う。そして働く。

結婚するなら御蔵の女性と言われるくらい昔の御蔵の女性は働いたそう。

水を運ぶのも桶を頭に乘せて運んでいた。島の女性の中年以上はほとんどがリュウマチだそう。それは島の産業を支えた

ツゲを急な山中から浜まで背負い、定期船で届いた生活物資や

食料を村まで背負い届けた。そのツゲは一本約10キロ。それを五本は背負ったそう。

そんな島の歴史を知らながら、感じながらの食事は東京での食事とは訳が違う。

大切な食料としての意識を感じながら食べる夕食は考え深いものである。

丸一商店で何を買うか迷っていた。みんなで食べるとは言ったものの、何を作ればいいのだろう…

妹は普通に焼きそばとか見ていたが、それは料理人としては出来ない事なので買い物は任せてもらおう。

一日目は軽くジャブのつもりで野菜炒めとサラダにしよう。肉は全部冷凍だ。

物資は海が荒れると届かない。だから島の人達は食料確保の為に生物はほとんど冷凍にする。

冬は海が荒れる為正月の物資が3月に届く事だ。その頃にはもちろん観光客もいない。

丸一商店にも御蔵島の歴史が刻まれている。当たり前のように食料が有り余っている日本でまだこんな島がある。

何もないと言う贅沢はこの事かもしれない。夕食の材料を買い、宿に戻る。さてさて準備だ！

1番の楽しみはミネラルが二倍だと言われている御蔵島の水が使い放題だと言う事。

帰ったらすぐにレタスをちぎって冷水に付けた。

ご飯もやはりこの水で炊いているだけあってほんのり甘いのだ。水が豊富って本当に素晴らしい。

オリーブオイルでんにくをカリカリにし（んにく高いのに、茶色くなっていたが気にしない）ドレッシングを作った。

豚肉、にんじん、ピーマン、玉葱で野菜炒めを作った。野菜炒めのコツは隠し味に「酢」を使う事。これが野菜の旨味を一気に引き立てる。

スタッフの人達にも好評だった。

テーブルにどんどん食事が並べられていく。お浸しの明日葉はさつき採ってきたものだ。

かなりうまいビールにぴったりだ。

明日葉は御蔵島に沢山あり、採っても明日にはまた新しい茎が生えるから明日葉と言うらしい。

「明日葉はみんなうまいって言うけどこの島では雑草だ」

と道雄さんは言う。

「この島の水は美味しいですね！」

って誰かが言う

「みんな御蔵の水を美味しい美味しいって飲んでわざわざ買って帰るけど、意味がわかんねえ。俺らはその水で風呂入るしトイレも流す」

と道雄さんは言う。

テーブルに一つだけ

自炊にはそぐわない物を発見。レトルトのハンバーグでイルカのセビレのように切つてある。

カップルの仕業だ。彼らもまさかみんなで食事するとは思ってなかったそう。

しかしそのレトルトハンバーグは絶品だった。私はレトルトハンバーグが大好きだ。小さい頃から

なんでも一から作る母親と食材屋の会社をしている父のもとで育っている為、レトルトハンバーグが逆に珍しく、間違えて好きになってしまった歴史がある。

あのパックの中で熟成された味は絶対にマネ出来ないソースが絶妙にご飯に合う。うますぎだ。

みんなでする食事は話も盛り上がり、仲良くなる。

イルカを触ってはいけないと言うルールに、守る為だと言うのはわかってはいるのだが、もしかしたら実はイルカは凶暴だったりするのか、他の理由があるのかと興味湧いてしまい、何故かを道雄さんに聞いてみたら、

「そりゃあイルカの気持ちになって考えてみたらわかるだろう。初対面の人間にいきなり触られたら嫌だろう？」

私は妹の前で少し恥をかいてしまった。ごもつともすぎて聞く事を間違えた。とても恥ずかしかった。

その後妹が道雄さんに言う。

「イルカさんにあんなに表情があるとは思いませんでした」

道雄さんは茶碗片手に答える。

「イルカに表情はないよ。だって筋肉がないんだもの。でもそういう思い込みは大切だ。思う事に罪はないからね」

妹は兄含むカップルやスタッフの前で大恥をかいてしまった。

道雄さんは「思い込みが大事だ」と言う事を何度も強調して妹を否定しないようにしていたが、その「思い込み」と言う言葉が出れば出る程、妹は恥の上乗りになるのだ。

そういう妹を観ながら飲むビールは最高に旨かった。

妹は確かに思い込みが強い人間だ。妹が高校生くらいの頃にこんな事を言っていた。

「私大阪に住んでいたから、たまに関西弁になんねん」

妹が大阪に住んでいたのは0歳から二歳くらいまでだ。関西弁どころか

言葉が発してないはずなのにたまに関西弁でしゃべらはるらしい。そんな事を思い出しながら、美味しくビールをいただいたのだ。

七年住んでいるナナさんが撮ったイルカのビデオを観ながら道雄さんは言う。

「脅かす訳じゃないけど観光客って無謀だよな・野性のイルカの中に平気で入っていくんだから。サファリーパークの中に歩いて入るのと同じだぜ。まあそんな事故はないけどね」

「俺達はイルカが小さい頃から居て当たり前だったから、宿もまだなくて観光客も来てない時期に1992年だったかな、初めてイルカの写真を撮らせてくれて男が来て、俺らはイルカなんか撮ってどうするんだって思ったよ」

その男は村中に不思議がられ、イルカ男と名付けられたらしい。

「島ではダイビング禁止されてるけど、それはイルカが人間が何時間も潜れる生き物間だと思わないようにする為に俺らが決めたものなんだよ。

もしそう思ったらイルカが遊んで人間を加えて深い所まで連れて行ったら死んでしまうだろう」

先の先まで考えて掟を作るのは食料だけじゃなく、島の文化なのだろう。人間が自然と共生していく為の知恵がこの島には溢れている。それは今からの日本にとって、地球にとっての大切な課題ではないだろうか。私達はそれを間近に感じる事が出来て幸せだ。

そんな事を思いながら食事も終わり、部屋に戻る。

第十章 初日の夜

部屋に戻り、布団を敷く。窓をずっと開けっ放しでクーラーは付けない。むしろ必要ないしそんなもつたいない事をするためにここに来た訳ではない。

目を閉じて自然の風を感じるのだ。自然の声を聞くのだ。部屋では携帯の電波が届かない。携帯なんか切ってしまう方がいいのだがそうゆう訳には行かず、一日目は仕事のメールや色々来てないかをチェックする。

中々電波が立たないので、一階に降りて外に出る。ずっと電波を捜して遠くまで出て、ようやくメール受信出来たと思ったら一件しか入ってなく、「顔ちえき」と書いてあった。要は迷惑メールだ。

そんなこんなで私は部屋に戻りいつの間にか寝る。後で妹に聞いたら

「島時間を大事にするんじゃない」

と言って夜8時に寝たらしい。私が目が覚めたのは夜中の1時。

それからずっと寝られなくて、携帯ゲームでテトリスをやっていた。

なんとも間抜けな夜だろうか

御蔵島の夜はそのまま静かにふけていった。

第十一章 二日目朝

朝の眩しい光鳥の歌声と潮風が優しく起こしてくれようとしている時、私は夢を見ていた。

海でもない、ただの水でもない、まるで母親の胎内にいるような、優しい水の中で守られているような初めて見るタイプの夢だ。

目が覚めて、一瞬自分がどこにいるかわからなくなった。

「ここはどこだ？」妹が寝ている。

「そうだ！今は御蔵島にいるんだ！」

改めて喜びが湧いてきた。

「お兄ちゃん、昨日島時間を大切にするんじやって言って8時に寝たけど夜中起きてテトリスしてたじゃん。島時間を大切にしたらん」

「ほんまじゃあ」

朝から笑いあってそれから二人の合言葉は

「島時間を大切にせえ」になった。意味ない所でいきなり使うのがポイントだ。

我々兄妹は意味わからん合言葉を作るのが好きだ。遥か昔の大晦日にどっちかが（どっちだったか忘れた）悪い事をした時に

「もう今日は大晦日じゃけえ」

って言った。二人は大爆笑。大晦日だから何してもいいじゃないか的な意味で全くわからんこじつけが二人のツボを深くついたのでだろう。

それから、今も二人は全く関係ない時にその言葉を使い、兄妹しかわからないコンタクトをとっている。

年末にしてその年の流行語大賞を取り、ロングセラーを生み出した瞬間だ。

もちろん今回の御蔵島でもその言葉は使われたが、この島時間は今後おじいちゃん、おばあちゃんになるまでのロングセラーになるに違いない。

久しぶりの大物だ。

しかし、盛り上がっている間もなく、のんびり島時間を大切にしすぎて朝ご飯の時間がないう事に気付いた。

「はよ、飯食いに行かんといけんぞー」

すぐに下に降りる。食堂に行くとの感じの良いカップルがさわやかに挨拶をしてくれる。

「おはようございまーす」

「昨日はぐっすり眠れました？」

「それがねえ島時間を大切にしようと思って8時に寝たら1時に目が覚めてずっとテトリスやっていましたよ」

食卓は大爆笑。

「全然意味ないじゃねえか」道雄さんも大笑い、7年住んでいるナナさんも

かなりツボに入ったそうだ。(いや、少し言い過ぎた。ツボに入る程は長く笑ってない)

テーブルにはサバの塩焼き、ご飯、みそ汁、納豆、のりと朝ご飯の金メダル達が並んでいる。

旅で一番のご飯の楽しみは実は朝ごはんだ。

一人暮らしで中々、朝ごはんなんて食べられないのでたまに泊まる宿での朝ご飯は最高だ。

「今日はみんなドルフィンスイムでいいのかな？道雄さんはハシを進めながらみんなに聞く。

「はい！お願いします」感じの良いカップルは今日もイルカに会いに行くみたいだ。

「僕らは本殿のお参りでお願いします」

今回の旅の一番の目的は神社参りだ。本殿は島の反対側にあり、神様の森の中に鎮座する。車で行ける所まで言った後に神の道と言う所を歩いて行く。

ガイドブックには半日と書いてあったから用意周到で行ったが実際にはそこまで必要はなかった。

「それにしてもなんでお参りなの？」

道雄さんは不思議そうに聞いてくる。

「いやあ、神社が好きなんです」

「拝殿よりかなり小さいよ」

なめないでもらいたい。そんなのとくに事前に調べて知っている事なのだ。

妹が。

道雄さんは若い兄妹がなんであんな時間かけてまでお参りに行くのだと不思議そうな感じだった。

朝ごはんをたっぷり食べ、一旦部屋に戻ってから用意し、迎えの車を待つ。面白いのは村に定期的に流れる定期船の入港状況だ。

「。ピンポンパンポンツ」

「御蔵島村役場からお知らせします。本日の定期船は午前9時頃入出港の予定です」

島の放送が村のスピーカーで毎日流れる。狭い村だから出来る技であろう。日本も昔はこんな感じだったのかなとか思いつつついつい聴き入ってしまう。

ぼーっとしていると時間がない事に気付く。また島時間を大切にしてしまった…

もう迎えの車が来ていると言うのだ。もう8時か！早く行かなきゃ！
妹と慌てて階段を降り、入口で待つ車に乗り込む。

「おはようございます！今日はよろしくお願いいたします」

って元気よく挨拶すると

「おはようございます！よろしくね」

「行き的車うるさいけどごめんね」

「あーら、賑やかでいいじゃない、わたしそうゆうの好きよ」

4人くらいのおばちゃんのハイテンション&ハイトーンをいきなりくらう。

御蔵島の神様の森コースは奥地にあるため、ガイドさんなしでは行ってはいけないルールがあるのだ。

今日のガイドさんはおっとりとしたおじさんでいい感じなのだがおばちゃん達のハイトー

ンには一抹の不安を覚えた。

「賑やかなのは好きだけど、今日は神聖なものだからなあ…怖いなあ」
後に不安は的中する。

第十二章 神様の森

御蔵島には島の東側と西側に一本ずつ道路がある。しかし、どっちも森林に遮られて行き止まりになっているから島を一周する事は出来ない。

参拝の森へは車で30分くらいの場所へ入口があり、そこから徒歩で40分くらいだ。

我々兄妹は山へ入るに大失敗をしてしまい、その不安でいっぱいだったのだ。

二人共水を買って忘れてきてしまったのだ。

山へ水無しで入るなんて危険極まりない。しかし忘れたものはしょうがないから対策を考えていた。

そしたら車が一旦止まる。

「どうしたのだろう、まさかこんな所でトイレとか言わないだろうな」

「みなさん道の左手をくらん下さい。」

道の脇に小さな鳥居が置いてある。

「なんだ？この小さな神様は…？」

「この神様は草まつりの神様と言って、昔から山へ入る時は草をお供えして無事に帰って来られる事を祈るのです。そして無事帰ってきたらその草をまた山へ返して御礼を言うのです。ここに草が残っているのを見ると村の人はまだ山に誰かがいるって思うのですよ」

「へえ本当この知恵は面白いな。神様と共生ってこの事だね」

いちいち感心する事ばかりだ。参拝ツアー一行は車から降りて、それぞれ無事を祈った。

「水がなくても困りませんように」

車が到着するとまずは森の説明を聞く。
森の植物は全て神様の物だから持って帰ってはいけないと言う事。

そりゃそうだそんなのを許していたら三宅島の時のようになってしまいかもしれない。

そんな時に妹がたんぼぼを発見。

「たんぼぼだあ」って見ていたら、白ハットのおばちゃんが

「それは和たんぼぼよ、和たんぼぼは珍しいの。ちょっと見せて、うん、やっぱり和たんぼぼよ」

ありえないくらい甲高い声でびっくりした。荷物を背負って巨樹の森の入口へと向かう。
いよいよだ。胸が高鳴る。

御蔵島には神山と呼ばれる地域が14カ所ある。昔は4カ所と言われていたらしい。

神山は海側に多くて島に強烈に吹き上げる風から守る防風林になっているのだ。

まさに島は神山によって守られている。

こうゆう話がある。

1995年の台風12号が御蔵島の森に大きな災害をもたらしたが、この14カ所の神山の森には被害が全くなかったそうだ。

神山のそばにある「御蔵島の大ジイ」も稲根神社の神山も近くの森が痛め付けられたのに
も関わらず無傷だった。

赤沢巨樹の森の隣の山は崩壊したのに、被害は赤沢神社の神山寸前で止まっている。

まさに神様の森。森に入るとガラッと雰囲気が変わった。

神秘的とはこの事を言うのだろう。自然の声を聞こうと耳を澄ましてみる…

「ここすべるから危ないわ、この木はあざみよあざみ。まあ大きいあざみ、ほら、この植物なんだって、ほら、あれよあれ、煮物にしたら美味しいのよ…」

和たんぼぼおばさんがまた甲高い声でしゃべりあげる。

自然の声を聞くどころの騒ぎではない。知枝美もかなり苦笑いだが、さすがの社交家
ちゃんと相手している。

山の脇にレールがついている。そして初めて見るツゲが沢山自生している。

「このレールはツゲの出荷用に作られたものです。昔は女性が担いで里まで降りてたんですよ。」

歩くだけできついこの道を何十キロも担いでいたのだ。

「あーたし無理無理、やーねえそんなの無理よ」

また和たんぼおばさんだ。歩いていくと見た事あるような植物を発見。

「これは明日葉です。取っても明日には新しい芽が生えるから明日葉といいます」

「そう、明日葉よ。おひたしにすると美味しいの。私なんかはねえ…」

また和たんぼおばさんの甲高い声が森に鳴り響く。レールが終わる頃には

話すのも小さな声で話さなきゃいけないと思えるくらいすっかり神様の森の雰囲気なおばさんはしゃべり続ける

本殿行くまでに一度道を間違えた時も

「ここにわかるように矢印を立てたらどうかしら？そうしたらわかるでしょ、」

と周りの人に言いまくり、しまいにはガイドさんにまで手をあげて進言していた。

こんなに考えに考え抜く島の人達があえてそうしている事が何故わからないのだろうか。奥の院は尊い場所で軽い気持ちで行ったらいけない場所なのに少し度が過ぎるなど思いながら手作りの小さな橋を渡って少し歩いたら傾斜になっている所へ、本殿は奉られてあった。

第十三章 稲根神社本殿

傾斜の真ん中に立つ小さな神殿。その姿を見たら鳥肌が立った。

今まで会った事もないような神様な感じで、やっと会えたような感覚に襲われた。いつものポジティブシンキングでもいい、でも確かに今感じているのだ。

「あの中には鏡、勾玉、剣の三種の神器が奉られています。でも神主さんしか見られない

けどね」ガイドのおじさんは笑って言う。

「この神様は島の人が里に降りてきて神様になって下さいって頼みにきたけど、ここを動きたくないって断ったんだよ。だからここに祠を作って、その間はあの石の中に入れてもらったんだ。」

びっくりするような話をさらっとする。

ザワザワと言う風の音。ひんやりとした空気。

お参りするのももちろんだが、ここまで来る事に意義がある。なんとなくそう思った。

だがしかし、他のおばさま達のお祈りが早い事早い事。和たんぽぽおばさんなんて、パンパンって手を叩いて言って

「ここまで無事来られて感謝です」

とだけ言ってお参り終了。

でも私が今まで聞いた情報によるとあながち間違いではない：かなりポイントを自然に掴んでいる気がした。

おばさんが終わり次第、私と妹は塩で清めたおさい銭と、御神酒を出して

自己紹介とここまで来れた感謝を述べ、今自分の周りにいる大切な人達の事を紹介した。

この人はどうゆう人でどう頑張っているか。

自分の与えられている役割もちゃんと全うする事を誓い、世の中にきちんと

自分が出る事はやるから、その代わり周りの人達が健康でいれるように、どうぞお守り下さい。

完全に取引である。一方的にお願いして叶うと思う事自体が間違いだと思う。

ザワザワっとお参り終了後に拭いた風は、商談成立の風である。

おばさんもガイドさんもまさかこんな若い二人から御神酒が出てくると思わなかったらしく、びっくりしていた。

参拝した後は意外にあっさり本殿を後にするが、帰りはとても心地良い気分だった。妹も嬉しそうだ。

この場所に来る為にはいくつもの課題をクリアしなきゃ来られなかった。

御利益があるとかじゃなく、この場所に来られたと言う事がすごい事なのだ。

見えなくなる本殿に最後に一礼した。

「また妹と来ます」

来る途中でみた巨樹の神々しさ、ここは全国で二番に巨樹が多い地域らしい。

一番は意外と東京だ。それは面積が違っただけで密集度は全国で一位だそうだ。

御蔵島にはラピュタの森って名前の森がある。最初はその名前にかなり惹かれた。大ジイやボロ沢の巨樹みんな森の神様だ。

正月に使うウラジロと言う植物も有りすぎと言うくらいびっちりと生えていたあざみも人が入らないからトゲが痛くないそうだった。

ガイドさんは帰り道、杖で蜘蛛の巣を払うように進みながら言う。

「道の途中にカツオドリの巣があるかもしれないので気をつけて下さいよ」
行きの道の途中でもカツオドリの死骸があった。

「カツオドリってなんだ…？」

「あのうみねこがカツオドリじゃない？」

妹は確か、ドルフィンスイムの際にうみねこにかなり反応していた。

カツオドリは通称オオミズナギドリと言って中型の海鳥である。

何故カツオドリと呼ばれるかと言うと、その名の通り、オオミズナギドリが群がっている海面の下にはカツオの群れが見られた事から呼ばれているそうだった。

珍しい鳥のはずなのに島には約150万羽生息しているという。巣立ち前のカツオドリは、かつては島の重要なタンパク源として捕獲されていたのだが、それもヒナが巣立つてからたった3日間だけだそうだった。それには理由がある。

カツオドリは5月7月までに卵をたった一つしか産まなく、一週間くらいの期間を、雄雌交互に温める。

巣立ちまでもし子供が捕獲とかでいなくなると、そのカツオドリ夫婦は離婚する率がか
なり高いらしい。どうやら捕獲された事で喧嘩するみたいだ。

だから巣立ちの後の三日間だけは親鳥が離れていくので捕獲してもわからないそうだ。
それにしてもこのカツオドリ、かなり興味をそえられる鳥だ。

まず、綺麗好きで巣の中がかなり綺麗で羽一つ落ちてないと言う。

そして長距離用に進化した大きな羽は飛び立つには向いてなく、一度木に登ってから飛び
立つそうだ。

しかもちゃんと列を作って順番に並んで飛ぶらしく、もし離陸に失敗したらまた列に並び
直すらしい。

もうそれを聞いた妹の目はハートになっている。なんて愛らしい生き物だ。

森の住人達のエピソードに触れながら、神様の森から離れていく。帰りに展望塔に寄って
から帰る。

展望塔からの景色は絶景だ。

「こないいい天気は久しぶりだ。中々ない」

と、ガイドさんは嬉しそうに言っていた。

和たんぽぽおばさんは相変わらず、ずっと話してまくっていたが、最後の方は普通に…
うるさかった。

あまりにもうるさいので意味なく携帯のムービーでつつい撮ってしまったぐらいだ。

第十四章 やまやのかき氷

帰りにガイドさんが我々に言っていた事を思い出す。

「なんでわざわざお金払ってまでお参りするのかは、正直わかんねえ、でも参拝が好きな
ら三宝神社の奥の院があるから行ってみな」

そう、神様の森へはガイド無しには入れない。ガイド料金は一人4千円かかるのだ。

当然だが内地から来る人間は島の常識がわからない。島からすると、何故わからないかが

わからない。

ルールを守らずに、遭難にあったり色々問題あって島の人は大変な思いをしたらしい。だからちゃんと観光客には説明する事になっているのだ。

「奥の院行ってみようよお兄ちゃん！」

何を当たり前の事を言っているのかが今一わからなかったが、また本日の楽しみが増えたのだ。参拝ツアー一行は展望台の帰りに車を置いた場所にあるエビネセンターに立ち寄る。

ニオイエビネとは、快い香りを放つランの一種で、他のエビネと交配してない純潔種は御蔵のものだけと言われている。

「こんにちわ！」

そこのおじさんが珍しそうな顔で出てきた。ガイドさんが言う。

「ちょっと見さしてやってよ」

「いいよ。お茶飲む時間ある？」

「いやあまりない。じゃあ後で。」

一行は木の通路で出来た道を歩いて降っていく。

「ニオイエビネはその名前の通り離れてもニオイでわかるぐらい強烈なニオイだから昔は毒花だと思われていたのです。」

「へえ」

「それが急に御蔵のエビネが高価って事になって乱獲するようになって島からエビネがなくなっただんです。一本30万とかだから。エビネ御殿を立てた人もいるよ」

「へえ」

妹はへえへえ言っていた。このガイドおじさんを気にいったのだろう。ちゃんと聞いているよという姿勢を崩さなかった。

行きにもあったがビニールハウスで何かを栽培している。そこに大人が何人かいる。

多分エビネセンターと言うぐらいだからエビネの交配や栽培をしているのだろう。

私はそう信じていた。

ガイドさんは重い口を開く…

「ここはエビネを栽培しようとして作られたものです。栽培は難しいので今は野菜作りを楽しんでいます」

スクープを逃さないように慌てて妹を見る私。これは確実に妹のツボだ。

この大人達は、エビネセンターでエビネを作らず、野菜作りを楽しんでいると言うのだ。案の定顔を崩して腹を抱えて笑っている。

「お兄ちゃん…楽しんでるって」

やはりはまっていた。

そりゃそうだ、ガイドさんが当たり前のように言っている事は完全に島時間だ。

楽しい一時を過ごした後、一行は車に乗り込み、里へと向かう。

まだ稻根神社の余韻が残っていると言うのに和たんぼおばさんは甲高い声でしゃべり通す。

エビネセンターの時もずっとしゃべっていたのだが、防衛本能でいつの間にか聞こえなくなっていた。

しかし車はそうゆう訳にはいかない。遮られている車の中では音は反射し、回る。和たんぼおばさんは言う。

「昨日もね、みんな早く寝ていて、私まだしゃべりたいものだから起こしてしゃべったわ、オホホホ」

聞いていて辛いその状況を想ふだけで胸が痛くなる。ここにいるおばさま達は困難を乗り越えてきた戦士だったのだ。

帰りにまた草奉りの神社に立ち寄り、無事に帰れた事のお礼を言う。そして奉った草を自然に返す。

本当は持って帰ってお守りにしたかったが島のルールには従わなければならない。

おばさん達から興味ある情報を入手した。里にある「やまや」と言う店のかき氷が激うまだと言う事。

氷も御蔵島の天然水で作られ、シロップもあずきも手作りらしい。そう言えば昨日丸一商店で買い出した帰りに氷って旗が出ていた。

かき氷と聞いて妹の目はまたハートになっているこれは兄としてと言うよりは「ヒト」として行かねばと強く思い、かき氷を食べる事を決意する。

和たんぽぽおばさんはどうやら神社に拝殿の行くらしく、当然のように我々と一緒に行こうとしていたので、強く、強くお断りする。

やまやの近くで降ろしてもらい、いざ氷山へ。かわいらしいおばちゃんが一人付いてきたので一緒に食べる。

やまやの入口に行くと大繁盛中だ。メンチカツ定食がかなりうまそうだった。

二人はかき氷のあずきを注文。メンチカツ定食は250円とかで高めだが、よく考えたらこの島の物価は全て高いのだ。御蔵島に物資が届くまでにお金かかるから当然だ。

出てきたかき氷は驚きのおいしさだった。真っ白で雪のような氷、上からシロップをかけずにグラスの底にあずきとシロップを入れている所が自信の現れだろう。

やっと摂取出来る水分だ。あつという間に食べてしまった。妹もかなりのご機嫌だ。帰りにいつもの急坂を登っていると、道雄さんがしかめっ顔で降りてきた。

「今日は6時半からな」

と一言だけ残し、そのまま去って行く。6時半とは夕食のメドだ。島の人間は基本忙しい。昨日道雄さんと会った時は消防隊員になっていた。

「この島ではみんなが仕事を掛け持ちしているんです。小さな島なのでやる事が多いのです。だから誰が偉いとかそうゆうのはないのです」

と、7年住んでいるナナさんが宿で言っていた事を思い出す。

島のお医者さんも一人しかいなく、内科、外科、産婦人科、なんと獣医までこなすそうだ。

まだ二日しかないのにこの島には不思議がいっぱい。

第十五章 御蔵島探検

二人共山登りの恰好をしているので一度宿に戻るのだが、戻る前に夕飯の買い出しの下見に行く。今日は昨日より少しグレードアップで中華料理をご馳走する事にした。

島には丸一商店と西川商店の二つしか店がないのだが、西川商店に置いてあるアシタバクッキー！これがまた絶品だ。かなりうまい。今日は西川と丸一で買い出しをして宿に帰る事に決める。

宿までの坂道が急で大変だ。この坂道をみんなが毎日歩いているのだから、足腰鍛えられるはずだ。

しかも島は自転車禁止だ。学校に練習用の自転車一台あるだけらしい。

誰かが道雄さんに

「どうして自転車禁止なんですか？」と聞くと

「この島で自転車なんてなんの役にもたたねえよ。アスリートでも目指しているなら別だけどあの坂を自転車で登れねえし、あの坂道をくだったらブレーキ壊れるだけだ」

確かに。聞かなくてよかったと思う瞬間だった。また恥ずかしめをうける所だった。

宿へ戻ったら食堂に昼食のお弁当が並んでいた。腹減ったのでなんでもご馳走に見える。感じのよいカップル（彼氏が渡辺くんと言う名前なので次から渡辺カップルと言う事しよう）もドルフィンスイムを終え、宿に戻ってきていた。

「イルカいましたか？」

「はい！会えましたよ。でも昨日の方がすごかったなあ」

お互いの話に花を咲かせながらお弁当を食べる。ごちそうさました後は部屋ですこしダラダラし、着替えてからいざ三宝神社奥の院へ。

左側に三宅島の見える道を降り、稻根神社の拝殿に向かう。三宝神社は稻根神社の隣にあって、奥の院はその更に奥だとガイドさんが言っていた。稻根神社の麓まで来たらその横に登り坂がずっと続いていた。多分ここだろうと、奥の院探しへ。

坂の入口の所に小さな鳥居があり、無事奥の院に行ける事を祈り、出発する。

第十六章 三宝神社奥の院

坂は相変わらずかなりきつい坂だった。

永遠と登り坂で大変だけど、小さい頃実家の裏山探検とか思い出してだんだん楽しくなってきた。

右側にはダムみたいなものが見える。しかし水は入っていない。

なんだろうと思いつながらダムを覗いてみると高さに怖さがじわっと股の方から上半身へつきぬける。すぐに道に戻り、登っていく。しかしいくら登っても登ってもそれらしきものはない。

「おかしいなあ…全然ないぞ」

「奥の院じゃけえ、あんま人が行かれん所にあるはずよ」

「ほんならもうちいと上登ってみるか」

まだまだ登り続ける。そしてだんだん道が細くなり、木で塞がれたりしてとても道の役割を果たしているとは思えない。

それでも進んでいったらとうとう行き止まりだった。

しかしその行き止まりの先はでっかい人工建造物があり、ダムかどうかはわからないが水の流れを止めるような鉄柵があり、それより上はサンダルだから行けなかった。

なんとも冒険心をくすぐるような建造物だ。

後から聞いたらどうやら土砂崩れを防ぐためのものらしいが、あんなにすごい建造物が水を売ったり商売に使うものじゃなく、里を守るためだけのものだったなんてまさに島の奥の院とはこの事かと思ってもいいぐらいだと思った。

意気揚々と降って行く妹の姿は小さい頃と変わらない。

何事も楽しそうに人一倍喜び、人一倍感動する。

一緒にいる人間はその顔を見て更に楽しくなる。自分はいつもどこか冷静な所があつてすぐに客観視をしてしまう癖があるので、そうゆう所が羨ましく感じるが、それは誰もが認める妹の素晴らしい所なのだ。

来た坂道を降りながらそんな時間を過ごしているが二人共突然ある事に気付く。
妹が勇気を出して口を開く。

「ねえ…さ…さっきの鳥居が奥の院じゃない…？」

そう、行きに無事に行けますようにとお祈りしたあの小さな鳥居が奥の院じゃないだろうかと言う事に気付いてしまったのだ。

「そうだと思う。さあ…ゆこう」

二人は元の場所まで降りてきて、その鳥居に御神酒を渡し、いつものように参拝をする。

「無事…ここまで来れてありがとうございます」

最初に祈ったのは

「無事奥の院に着きますように」と言う願いだ。

ちゃんと叶えて下さっているではないか。ものすごく遠かったが。

奥の院から続く道に三宝神社があり、やはり奥の院だった事を痛感。

でもいいのだ。出歩かないと知識は得られないものだ。

そして、また稻根神社拝殿に今日一日が素敵な日になった事、無事本殿に行けた事を報告し、里にまた降りていく。今度はいよいよ夕食の買い出しである。

そのまま降りて行くが妹がもう少し下まで行きたいと言うので少し島探検をする。

だいぶ降りた所でちょうど「イルカの見える丘」と言う場所にベンチがあったのでそこで休憩する。

渡辺カップルも昨日行ったそうだが、イルカは見えなかったらしい。だから期待はしてなかったが、その時に小さいものが遠くの海ではねた。

「イルカだ」

イルカが見える丘でイルカを見ると言うベタな事になってしまったが、やはり嬉しいものだ。風には中々ないらしいのだが、今日は珍しくいたのだろう。私は神社に行くとき眠くなるので、妹をほったらかし、ベンチで10分睡眠。この10分睡眠はかなり元気を取り戻すのだ。妹はずっとはしゃいでいるからすぐ疲れるのだ。

第十七章 この旅最後の夕食

イルカの見える丘でイルカを見た後は夕食の買い出しだ。丸一商店に先に行き、豚肉を購入する。今日は中華料理だから片栗粉や、ごま油を買う。水がうまいのでサラダ用のレタスも購入。

自炊なんて響き…まるで自分の為にあるようなものだ。

ただ、私みたいにちゃんと作る人ばかりじゃないだろう。宿の人は客によって

毎日のご飯が違おうと言う事は散々な物を食べる事だつてあるのだろうなと思いつながら、私がいる時だけでも、島では滅多に食べられない中華を食べてもらおうと思ったのだ。

中華は基本的にある材料で作ってしまう。昨日の野菜の残りもあるし、それを使いながら新しい料理を考える。料理が出てくるのも楽しいが、振る舞うのはもっと楽しい。

妹は一切手を出してこない。と言って料理が出来ない訳じゃない。東京にいる時にいきなり行って「腹減った！飯を食べさせてくれ！」って言った時に鯛めしのセットに手作りのヒジキが付いてきたくらいだ。

そんな妹が何故料理に関わってこない理由はただ一つ。

池永家の文化にて片方が出来る時は一切口出しをしないし手を出さないと言う自然の掟があるのだ。池永兄妹は得意分野には完全に相手に任せる。それが礼儀でもあるし、暗黙の了解なのだ。

今回の旅でもチケットや宿、全ての段取りを妹がやった。私は一切手を出さなかった。

妹も料理は好きだがあんなに張り切っている兄を見て手を出してくるはずがないだろう。普通は二人で一緒に作ったりするのだろうが私は一人の方が料理が早い。

だから妹には食べる事だけを楽しんでもらう方が嬉しいのだ。夕食にはタカベと言う魚の塩焼きや、明日葉のツナ和えや、また美味しそうなのが並んだ。

渡辺カップルは昨日のレトルトハンバーグとは違って変わって炊き込みご飯と言うハイレベルな技を披露した。

無理もない。昨日はまさか自分らだけで食べようとしていたハンバーグが食卓に並ぶなんて思ってもなかった様子だったから今回は頑張ったのだろう。私は個人的にハンバーグが最高に美味しかったのだが。

みんなで囲む食卓は本当に楽しいし美味しい。二日目は特に打ち解けているので、楽しさも倍増だ。

みんなでご飯を囲みながら今日の一日の事を話す。お互いの情報交換の時間だ。夕食を食べながらイルカの話になり、道雄さんがこんな事を言っていた。

「最初はだいたいルールを説明してもわからないものだから、こっちもわからないものとして、あえてポイントだけを強く言うんだよ。いきなり来てわかるわけねえしな。」

「この島で酸素ボンベ付けてのスキューバ禁止されてるんだけど、それもイルカに人間の事を5分以上は海にいけない生き物なんだって教える為なのだ。もし5分以上潜れるもんだと思って、遊ぼうとしてシュノーケルをやっている人間を加えて海の底まで連れて行ったら死んでしまうからな」

確かに。この島は本当に自然と共存していく為の知恵が

すごい。カツオドリにしてもツゲなどの植物にしても、山にも海にもちゃんと決まり事があってその中で生活をしている。

人間が私利私欲を出すとあつという間に自然は壊れてなくなる。これだけのものが今もずっと守られてきたのは島の人達が常に先を読んで、子孫の為に作ってきた掟があるからだ。その掟こそ、子孫へ、そして島への先祖の愛情と言える事だろう。

私達はたった二日の滞在で沢山の事を学んだ。一人でご飯を食べても東京で外食しに行ってもこんな気持ちはなる事が出来ない。

この島の歴史を知り、人間として何が大切かを学ぶからこそご飯の一粒一粒の味が心に染み入り、生きると言う事の尊さが解るのだと思う。

この事こそ、今の時代を生きる、未来の子供達へ伝えなきゃいけない事なのだと思う。御蔵島で見る最後の夕日は真っ赤に染まっているが、雲が邪魔をして空一面を染める事はなかった。だがまたその完璧じゃない夕焼けの美しさを私も妹も感じる事が出来た。

(ア)

第十八章 渡辺カップル

夕食を終えて、外に出てみる。もう今日はやる事がないので、景色を眺めたり写真を撮ったりの時間だ。渡辺カップルも外に出てきている。

自然に話していたが、ゆっくりと話す事が出来たのは初めてだ。思えば彼らと一緒に行動したのはドルフィンスイムだけだった。話を聞くとどうやら彼はもうすぐタヒチに9カ月留学するそうだ。そして彼女は二週間後にフィンランドに旅行に行くらしく、次会うまでは二人の最後の旅行だったらしい。

「僕より彼女の方が先にフィンランドに行くから留学する僕が彼女を見送る事になるんです」って笑って言う。

それぞれに想いはあるだろう。でも彼らは離れる事を嘆くより、今を大切にしている。そんな気がした。

この渡辺カップルは歳の近い私が言うのもなんだが、今どき珍しいくらいピュアなカップルだ。

昨日の夜も部屋からずっと二人の笑い声が聞こえてきたのだが、なんと二人は部屋のドアを全開に開けっぱなしだったのだ。

二階のトイレは部屋を出て突き当たりなので明らかに我々が部屋の前を通る事はわかってはいるはずなのに結局朝までドアが全開なのだ。

普通カップルだったら、旅行の夜くらい二人だけの時間を大切にしようと思うのだが、このカップルはそんな常識を遥かに越えていた。

まるで中学生の恋愛みたいに夜中まで部屋から笑う声が鳴り響いた。なんともまあ、心地の良いカップルだろう。だからそんな大切な旅行だって聞いてさらにびっくりしてしまった。

でもそんな二人の時間を越える程の大切な一時をこの二人も我々と同じように御蔵島にもらったに違いない。

9カ月は意外にして長い。もしかしたらお互いに好きな人が出来て離れてしまいかもしれない。でも、思い出が深ければ深い程、離れない確率は高くなるはずだから

出来れば、またこのカップルが9カ月後に再開し、その仲良い姿を見せてほしいものだ。今回の相手がこの渡辺カップルで本当によかったと心から思った。

第十九章 花火

すっかり日が落ちて一度部屋に戻った。

「楽しかったねお兄ちゃん」

「ほんまじゃな。あのカップル最後の旅行って知らんかったわ」

「そんな大事な旅行でなんでドア開けっ放しなんじゃろ。ピュアじゃわあ」

二人で今日撮った写真とかを見ながら私は何かを発見する。

「これ、顔じゃない？」

三宝神社に参っている妹を撮った写真の三宝神社の祠のど真ん中に、おたくソースのおかめのような、百人一首の小野小町のような顔が妹を覗き込んで、にこっと笑っている感じなのだ。

「うわっほんまじゃ！すごいねこれ」

だがよくある事なので何もなかったかのように次の写真とかを見てたら、もっとすごいものを発見。お守り代わりに映した稻根神社本殿に何か写っている。

「これ…おかんじゃない？」

祠の左側は着物を着て祈っている姿、右側には母親にそっくりの陰が写っている。うちの母親は見た目、かなり個性的で母親のシルエットに似た人を見たが事ない。だから断定出来るのだ

後に色んな人に見せても、母親を知る人はほとんどが驚いていた。さすがにびびった。そんな中、誰かが部屋を覗いている！

「誰…？」

渡辺カップルの彼女だ。にこーって笑って手になんか持っている。

「花火やりませんか？」

「ナイス…！！なんてナイスなんだ…！」

まさかここで夏のアイテムが登場するとは思わなかった。

まさかあの匂いがここで嗅げるとは思ってもなかったので兄妹嬉しくて、大はしやぎ。持ってきた本人以上に大はしやぎだ。

道雄さんにバケツとチャッカマンを借りに行って、宿の前で花火をする。

もう花火をしている三人の顔は子供そのものだ。

私は自分で自分の顔が見られないので、あえて自分の表情には触れないでおこうと思う。

きっと落ち着いたランのような顔をしていたに違いない。

「この花火百均で買って来たんですよーそれにしちゃあよくないですか？」

彼女嬉しそうに花火に火を付ける。火がつかない…

「百均だからじゃないの」からかいながら、火を付ける。

勢いよく出た火花に拍手喝采を送りながら狂ったように次から次へと花火の火花で花火を付けようとする。まるで花火を楽しんでいるよりも、火を絶やさぬ事に命をかけているみたいだ。妹は妹で勢いよく出た火花をくるくると回している。

これは小さい頃、彼女が3歳くらいに北海道の祖母の家で花火をした時から変わらぬ。その時は母親がくるくる回しているのを見ながら、真似てくるくる回していた。これは本人は知らないが確実な歴史であり、くるくる回す癖はその時に培っていた彼女の文化である。

勢い花火が終わった後はメインの線香花火へ。火を付けて火が付き始める。ぶつぶつとあの溶岩のような塊が作られていく。

その後は人の心をくすぐるあの思い出のような火花だ。

何故線香花火ファンはこうも多いか。

やっぱり落とさないように、大切に大切に初めて出る美しさだから勢いよく出る花火と違って自分も共に作りあげてる気分になれるからじゃないだろうか。

はかないものの美しさ。何事も終わるからこそその一瞬一瞬を大切にするのだろう。

線香花火をしている時人の顔は優しい顔をしていると思う。

これが後に素敵な思い出に変わっていく事を一番印象付けてくれる花火だろう。

4人共それぞれの想いを心に抱きながらジィジィと放つ小さな火花を眺める。火玉が落ちた後は少しの寂しさと…

「ジュワッ」

4人線香花火に酔いしれていたのだが、バケツの水の中に落ちた火玉の音があまりにも気持ちのいい音だったので、だんだん線香花火を楽しむよりも

水に花火が落ちる音を聞く為に花火をやっている雰囲気が変わってしまった。

やれやれである。実にやれやれである。

第二十章 鉄砲場での宴

「やっぱり花火は夏の匂いだな」

花火を見に来た道雄さんは言う。花火とバーベキューの炭の匂い、ココナッツの日焼け止めの匂い。夏の匂いは大好きだ。

「このバケツの花火どこに捨てればいいですか？」

「いいよ、やっつくよ」

って道雄さんはバケツを持ってすてに行ってくれた。花火が終わった後もしばらく外にいた。

7年住んでいるナナさんも、最近入ったばかりの女の子もみんな外に出て道路に座り込んで夜の御蔵の風を受けている。だんだん肌寒くなってきたので、みんな自然に宿に戻る。

「あれ飲みたくない？」

完全に身体がお酒モードだ。沢山飲みたい訳じゃなくて、最後のシメとして宴をしたい気分になられてたのである。

食堂に行って水を飲んでたら彼女が嬉しそうに走ってくる。

「道雄さんお酒飲んでいいって！」

道雄さんは4本くらい島焼酎を持ってきてくれた。氷と水とコップが用意され、道雄さんはサキイカを持ってきてくれた。

「これは青チユウと言っていいお酒だよ。かなりきついけど、こっちは結構すっきりしているかな、飲みやすいのはこっちだけど青チユウ飲んだ後だったら味がしねえかもな」

道雄さんは説明してくれる。私はまず青チユウからいった。

青チユウとは八丈島からまだ先にある青ヶ島と言う島の焼酎の事だ。

かなり強いお酒だがうまい。癖が強いから無理な人は無理だろう。

お酒を飲みながら色んな話をする。

「御蔵島は楽しんでもらえた？」

みんな楽しむ以上のものを貰っている。妹は道雄さんにエビネの話をしていた。

私はまたくだらない質問をしてしまう。

「ここはエビネ御殿ですか？」

「ここは借金御殿だ」

一堂大笑い。

「俺もずっと飲みたいんだけど、明日があるから今日は10時半でお開きにしよう。

明日は10人くらい女性が来るから朝バタバタうるさいけど勘弁な」

「女性10人ってドキドキですね」

焼酎片手にハツとしてしまった。

まずい…迂闊にもしようもない事を言ってしまった。だが事は大きくならずですんだからよかったとホッと一息だ。渡辺カップルもとても楽しそうだ。

イルカの事、三宅島の噴火の事、鉄砲場の事、島の歴史や10時半と言う時間が来るまで色んな話を聞かせてもらった。

最後の夜はかなり完璧だった。私は二杯しか飲まなかったのだが、妹はもう何杯かお酒を飲んでいたのでほんのり顔が赤かった。

楽しい宴をあとにしてそれぞれが部屋に戻る。明日はいよいよ東京に帰る日だ。

第二十一章 御蔵最後の夜

10時半頃にはもう二人共眠くなっていた。今日の出来事や、この旅の事、色んな話をしながらいつの間にか眠りについた。

この8畳くらいの部屋で寝るのもこれが最後だ。でも悔いがないくらい沢山のものを

貰った。

夜中は何回か起きた。最後の夜に一人で二日間を振り返りながら、ある事を考えた。旅で経験する事も大切だが、もっと大切なのは、そこで勉強した事、感じた事を忘れない事だ。自分の人生に繋げる事だ。

私はある事を決意する。もうすぐ来る妹の誕生日にずっと何をあげようか考えていたが、決意は固まった。

この旅を一生忘れないように、二人の旅行記を作り上げ、それを誕生日の日にプレゼントする事にした。

何分東京での予定もびっちり、休みがないのと新曲製作を控えてる身としては、この時間の取られるプレゼントに踏み切るにはかなり勇気がいったが、

やっぱりお金で買えるものよりも、お金で絶対に見えないものをあげたい気持ちが圧倒的に勝った。

その1番の目的は、将来妹と未来を共に歩む人が決まった時に、その人にこの旅行記を読んでもらう事だ。

妹がどんな事に喜ぶか、どんな歴史を歩いてきたか、どんな女性か、どれだけ周りの事を考える性格か、どれだけ愛情に溢れているか、どれだけ家族に愛されているかを知ってもらい、全身全霊を込めて大切にしてもらいたい。

兄は一生側にいたくてもそれが出来ない存在だ。だからこの大切な旅行を書きとめ、未来の旦那さんに渡す事が「兄だからこそ」出来る妹へのプレゼントだ。

隣の布団で寝ている妹を見ながらそう決意した。

隣の部屋から聞こえる渡辺カップルの笑い声。いつの間にか静まった頃御蔵の夜は落ちた。

第二十二章 御蔵島観光案内所

鳥の歌声が目が覚める朝。昨日夜中に何回か起きたのもあり、少し眠かったが、大好きな朝ご飯が待っているの下に降りて顔を洗ってから食堂に向かう。

その時に今日から宿泊の女性と何人かすれ違った。もし今回の旅行の相手がこの人達

だったら、夕食は何人前作らなきゃいけないのだろう。
16人前だ。

渡辺カップルでよかった・

朝ご飯を食べながら今日の予定をたてる。

船の到着が1時なのでそれまで少し時間があるので、昨日道雄さんが言っていた御蔵島観光案内所に行く事にした。そこで「離れ島」という

映画を見ると言うのだ。何回も言っていたから見なきゃいけないと言う事だろう。

後は7年住んでいるナナさんが着ているTシャツがほしいのでそれを買に行く予定を立てた。部屋に戻り、帰る準備をしてから渡辺カップルと待ち合わせ、里に向かう。観光案内所の場所は知らないのだが、カップルは知っているというので付いていく事にした。

石段から見えるこの南国の景色ももうすぐ見られなくなると思うと寂しいが、昨夜と違って「また来る」と言う気持ちの方が大きくなっていたので、また来る事を楽しみにする事にした。

御蔵島観光案内所はとてまニアックな場所にあった。しかも小さくて、倉庫みたいでかわいかった。

「こんにちは」

中には若い男性と女性が仕事をしている

「離れ小島を見たいんですけど。道雄さんに見て来いと言われました」

「ああ、はいよ。道雄に言われたんだ。好きだよねー」

若い少タイケメンの男性は笑いながら言っていた椅子を出してもらって離れ小島のDVDをセットする。

画面に離れ小島って出たがかなり古い映画だ。キャストも昔の水戸黄門のような作りだ。音楽も音声も古い。

そこには昔の御蔵島が映っていた。

御蔵島の歴史、まだ栈橋がない頃、島の人に聞いていた事を実際に映像で見るのは全然伝わり方が違う。

昔の接岸作業も、女性の働きっぷりも本当にすごい。私はふと思った。

この島で障害を持って働けない状態で生まれてきたらどうなるのだろう。長男じゃないだけで一生目の目を見ないこの島で「働けない」と言うのは致命的だったはずだ。表には出てないが、歴史の中にこういう問題もあったのじゃないかとふと思った。映像はまだ棧橋が出来てない頃のものでネガティブな表現が多い。

そりゃあ棧橋がないとこの島の人々は食べていけないのだから当然だ。
また歴史を勉強して御蔵島フリークに近付いた。

第二十三章 船が来るまで

観光案内所を後にし、いざTシャツをゲットしに行く。だがしかし、開いてない。今日は休みじゃないはずなのだが、開いてなかった。

仕方ないので、その店の近くの店でイルカのハガキを買う。その後に美美庵と言うお店に行き、ミニカレーを食べてから渡辺カップルに別れを告げ、二人で郵便局に行き、見送りに来てくれたスタッフあちゃんに手紙を書く。

「今日帰る。憲彦&知枝美」

御蔵島しかないスタンプを押してあるから楽しみだ。きっと喜んでもらえる事だろう。

その後西川商店に行き、お土産を買う事に。御蔵島にはお土産屋さんがほとんどなく、唯一のツゲのお土産屋さんは閉まっていた。

だから西川商店でお土産を買おうと思ったなら売切れた。早く買うべきだった。

西川商店は棚卸しで大忙し。今日は木曜日なので朝9時の定期船で一週間に一度の物資が届いたのだ。丸一商店の店の前も段ボールが山積みになっており、賑わっている。

「今日買い物したら、色んなもの作れるのになあ…」

もう12時前、宿には12時に戻ってきてほしいと言われていたので、慌てて戻る。もう帰る時間が迫っている。

第二十四章 しばしの別れ

宿に戻り、帰る準備をする。

宿に御蔵の源水という配送用の天然水が売ってあるので二人で買い、それぞれの自宅に送る。準備が出来たら車で棧橋へ向かう。

「楽しかったね」

渡辺カップルの彼女は言う。本当に楽しかった。

楽しいだけじゃない贅沢な旅行だった。

棧橋に付き、待合室で買い物したりしながら船を待つ。

私は御蔵島の本を買った。好きな場所の本を買いまくる癖があるのだが、幸い二種類しか売ってなかったので二冊購入する。

妹は道雄さんが撮ったイルカのポストカードを10セット買っていた。なんと豪快な買い方よ。

帰りの船が到着し、みんな荷物を持ち、棧橋に行く。

棧橋には道雄さんが待っていてくれて、ナナさんや新人の子も見送りに来てくれていた。

最後に会えなかったなと思っていたから嬉しかった。記念撮影して、船の到着を迎える。

きつとこの船で今来た人は、この接岸作業に驚いた事だろう。

我々はもう経験済みだからちょっとだけ先輩だ。

そんな事を思いながら道雄さんとみんなに別れを告げ、御蔵島に別れを告げ、船に乗り込む。

振り返ったらナナさんやみんなが手を振っていた。

妹は大きく大きく手を振り返っていた。

さようなら

ありがとう

また来るね

帰りも二等和室だ。

だが少し場所が違い、あまり人がいない部屋なので助かった。

荷物を置き、100円で毛布を確保し、寢室を作ってからデッキにあがる。

御蔵島にバイバイする為だ。もうすでに少し離れた御蔵島は最初に見た時の感覚と違って、大切なものを眺めている感じだ。

そこで写真を撮り合って盛り上がっていたら妹が

「あー!!!」

振り向いたら渡辺カップルがこっちに向かって写真を撮っていた。すかさず妹も撮っている渡辺カップルを激写。渡辺カップルは何も言わずに笑いながら下に逃げていった。

悪戯顔満載であった。

実はこれが渡辺カップルとは最後の接触となった。船が付いてお互い探してしまった為にあえなかったのだ。

次会うのは9カ月後だ。楽しみである。その時は飲みに行きたいものだ。

きつと嬉しいだろう。全員が9カ月振りに会うのだから。

御蔵島は不思議な事がいっぱい起こったが、それは最後まで続いた。

離れていく御蔵島を見ながら妹と手を合わせ、御礼を言った。

「ありがとうございます。また必ず来ます！」

「お兄ちゃん！見て！あの雲！」

さつきまで普通の雲だったのが、だんだん渦を巻き始め、龍のような形になったのだ。しかも顔まであって、島をぐるっと巻いてるみたいな形にほんの数分で変わった。

島の誰かにこの島は龍神に守られていると聞いていたから二人共びっくりしたが、祈りが通じて、姿を見せてくれたのだと感激して、また御礼を言って部屋に戻った。

それにしてもこれだけ沢山の人が乗っているのに船から御蔵島を見ようとデッキに出てきたのが我々と渡辺カップルだけなんて信じられなかった。

見られる人は見られて見られない人は見られないのだなあと思った。
あの雲見たらみんなびっくりするだろうに。
ありがたい話である。

船の中は7時間。ちょうど起きている時間だ。私はこの小説を書きたかったのだが一人でゆっくり書きたかったから、普段は絶対に出来ない作業、前の携帯のメモリーカードに入っているデータ全てを新しいメモリーカードに移し替える事作業をする事にした。

一度メモリーカードから本体に移し、新しいメモリーカードを入れて移動さすと言う気が遠くなるような作業だ。しかも私は写真の量が半端じゃやい。

結局船のほとんどの時間をその作業に使ってしまった。今同様指がかなり痛い。妹は暇を訴え、怒っていた。無理もない。だが私は

一度やり始めたなら途中で止められる性格ではない。時間のある限りやる。

妹のぶんぶんにビクビクしながら作業を終えて、何もなかったかのように妹に話しかけ、御蔵島の楽しい思い出を語ったら 予想を遥かに越える速度で機嫌が直り、

「島時間を大切にせえ」

と超爽やかな笑みを浮かべて言っていた。

なんて単純なのだ。

第二十六章 東京

午後8時半頃、船のアナウンスが聞こえる。

「ただ今横浜ベイブリッジを通過中です」

「もうすぐだな」

デッキに出てみるといつもの風景だ。たった三日なのに街のネオンがやたら久しぶりに感じた。

「帰ってきちゃったね」

妹はそう言って海を眺める。午後9時に船は竹芝桟橋に到着する。階段を降り、待合

室に向かうと

「少し道をお尋ねしたいのですが」

「道雄!？」

反応したらそこにはわざわざ迎えに来てくれた、仲間のヒデとあこちゃんの姿が。いつもの顔ぶれに寂しさは吹っ飛ぶ。

待合室のお土産コーナーで青チユウを買い、帰りに寄った行き着けのお店「利代」にあたかも御蔵島で買ってきたかのように渡した。

利代に寄ると、そこには同世代の某有名演歌歌手が飲みに来ていた。どれくらい有名かと言うと彼を知らない人は日本にいないだろう。でもそんな事を全く鼻にかけない大好きな友達の一人だ。

「おー!久しぶり!元気?」

「元気元気!カズくんは?」

「今御蔵島って伊豆七島の島からちょうど帰ってきた所よ、あつ妹の知枝美。尾道で一回会ったっしょ」

「あー!わかるわかる」

実は彼が尾道にコンサートに来ていた時にセブイレブンで妹の前を通ったらしく、彼の家で飲んでいた時に、その話をしたら彼はなんとその何年も昔の事を覚えていたのである。

すごい男だ。

少し経ってから帰るがなんと彼は知らない間に我々の飲み代まで全部払って帰った。

申し訳ないと思いつながら、また今度御礼をしようと思つ。帰りの電車で揺られながら、妹は言つ。

「御蔵島には電車なかったね」

「だね。なんかさあ、あの島って残るよな、余韻が。」

「うん、ぼーっとしたらついつい考えてしまつ」

まるで恋心と同じだ。

「知枝美、とにかく島時間を大切にせえ、尾道帰っても」

余韻の残る島：かつてそんな所に今まで行った事あっただろうか：

辿り着く事も保証されない秘境の島。

でもたった3日とは言え、実際に行って、歩いて、感じる事が出来たからもう秘境って感じはしないのだ。

また必ず来るねって

そんな気持ちが残っている島はもう秘境ではない。

大切な故郷だ。

第二十七章 最後に

故郷の論理はきつと様々だろう。

ほとんどの人が生まれ育った場所の事を言うのかもしれないし、東京の人は私に故郷があつて羨ましいとよく言う。だが、故郷は自分でも作る事が出来るし、考え方次第だと思う。

私の故郷はいっぱいある。小さな頃に何度か引越しをしたのもあり、東京、大阪、札幌、広島に住んだ。

だが、そうゆうのを関係なく、もし故郷が育った場所の事を言うのならば、例えば短期間でも心が育った場所と思うなら、そこを故郷にしているのではないかと思う。

そうして帰って来た時の喜びを感じる場所が一つでも増えたらそれは人生として楽しい事だ。

私は目を閉じると鮮明に思い出す。

御蔵島の香り、風、太陽と妹を。

暑い暑い真夏日のような陽射しが照り付ける宿の前の道。

きつと道にスポットを当てて写真を撮ったら、そんなにいいものが撮れるとは思えない。でも里へ降りて行く途中に見える三宅島や、子供の頃に毎日味わっていた自然の懐かしい香りに包まれながら歩くこの道はどんなに綺麗な景色よりも今や忘れる事の出来ない一生の宝物だ。

それはそこに妹の笑顔があったから。

初日に来た時はこの坂を降りながら、笑顔いっぱいではしゃぐ妹を見て、これがもしかしたら最初で最後の旅行になるかもしれないとずっと思っていた。

妹だっていつかは嫁に行く。家族だって出来る。そうすれば兄妹の旅行なんて必然的に難しくなるのは当たり前だ。

この旅行は最初からずっとそれを思っていたからこそ一瞬一瞬が大切に、妹の喜ぶ顔、感動する顔、はしゃぐ声、逃さないように、一つ一つを心に刻んだ。

幸せは後から振り返るよりも進行形で感じていたい。後に思い出に変わる「今」をもっともっと大切にしたい。

そんな想いで始まった旅は帰る頃には「また来よう」に変わっていた。

数日後に妹は広島に帰った。

帰った事をなんとも思わないようにして、あまり思い出さないようにしていたが、

畳の部屋で妹が寝ていた布団をしまう時に島での三日間を思い出してしまい、急に寂しさが襲ってきた。

だが、きつとまた何年後に御蔵島に行く気がするのだ。

だからそれまでにまた東京で頑張る事を決意し、次の楽しみにとっておく事にした。

ただのバカンスならきつと時間が経てば忘れる事だつてあるだろう。

しかしこの島で学んだ事はどれ一つも忘れてはいけない事ばかりだ。

昔の日本人が大切にしていた生きる為の知恵が確実にこの島には残っている。

生きるものは全て繋がっている事を知っているからこそ、掟を決め、未来の子孫に繋げる。

太平洋から吹き上げる風が御蔵島の山にぶつかり、常に雲を発生させる。

その雲が霧になり雨になり、川を作る。

その川の水はカツオドリの糞などの森の養分を多量に含んで海に運ぶ。

これがプランクトンの発生に繋がり、小魚を育て、それを餌にするイルカが住める豊かな海になる。

魚が増えるからカツオドリが繁殖する。

海の養分を含んだカツオドリの糞が再び山に戻り、森を育てる。

海と森を川とカツオドリが繋げ、理想的な生態系を作っている。

内地から人を呼ぶイルカがツゲの代わりに御蔵島の経済を支える。

島の人間はこの生態系を全て理解した上で掟を作り、他の人間から御蔵島を守っている。

こんなに自然とうまく共存している島は果たしてあるだろうか。

これは未来の日本に、これからの世界にとって大切な事を御蔵島は我々に教えているのだろう。

何もない贅沢さ。私は一生忘れない。

この小説を読んでもくれた人が一人でも理解してくれて意識が変わった人が現れたならば我々のこの旅が我々のものだけじゃなく、未来に繋げる更に尊い旅に変わる事だろう。

御蔵島に行く際には是非これらの事を理解した上で行ってほしい。

そうしたら、一生忘れられない意味のある旅になる事を約束する。

池永憲彦